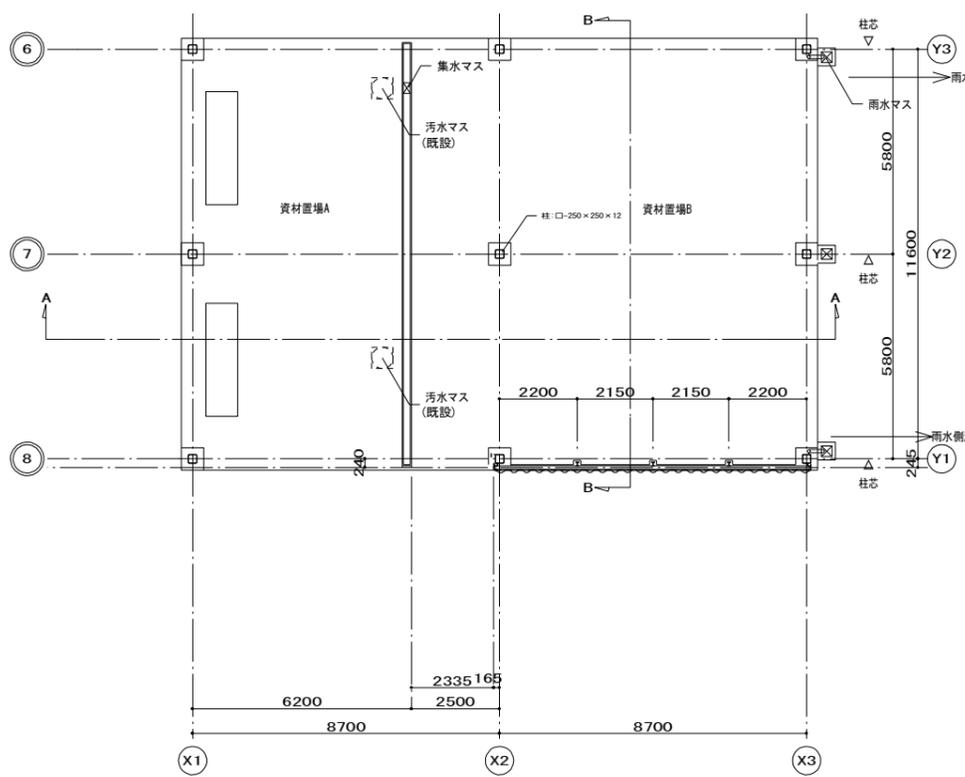
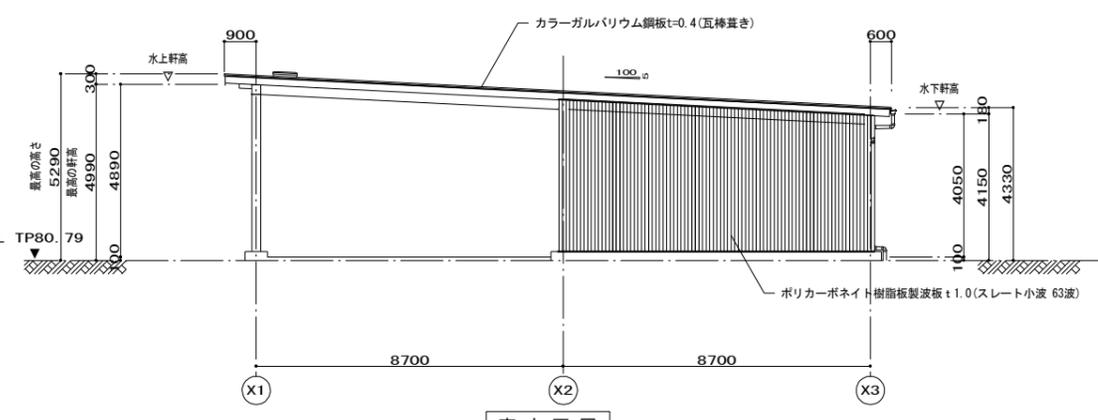


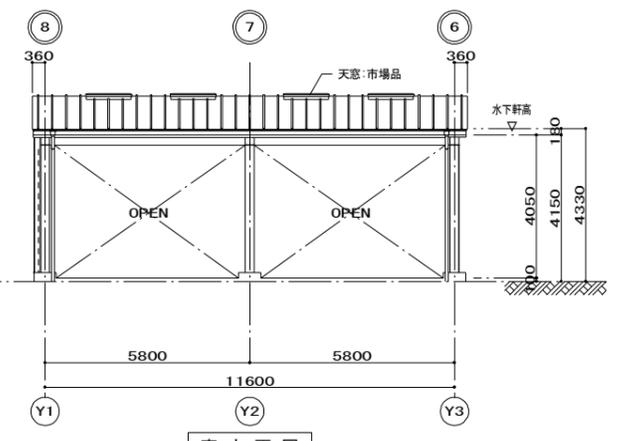
屋根伏図
⊠: 天窗 (689×1299) 設置範囲を示す



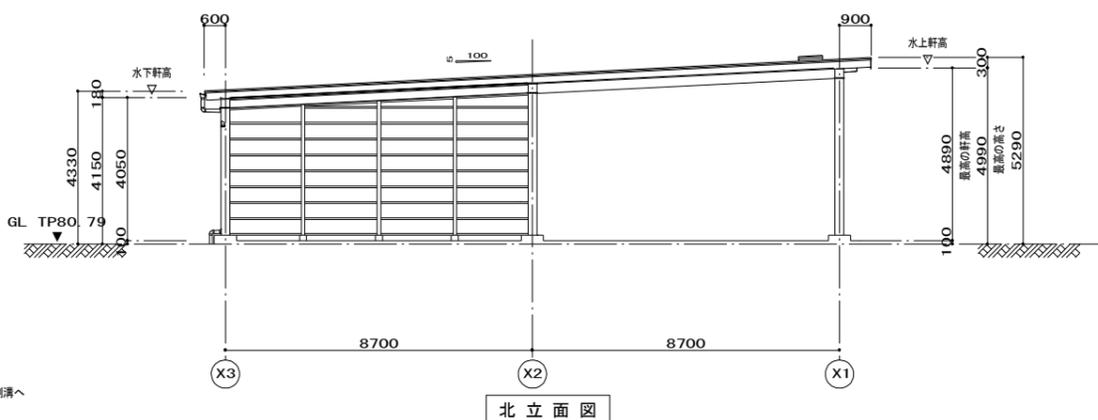
資材置場A・B平面図



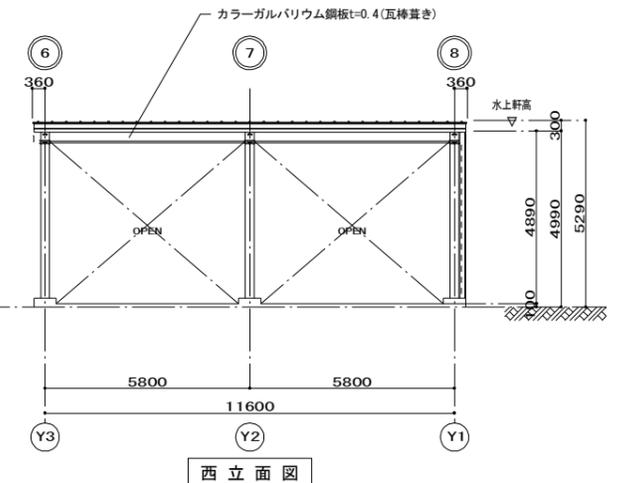
南立面図



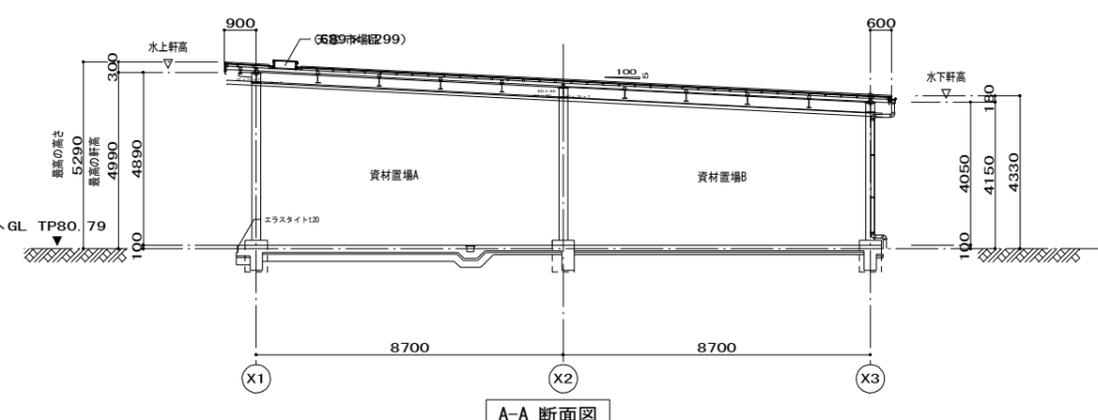
東立面図



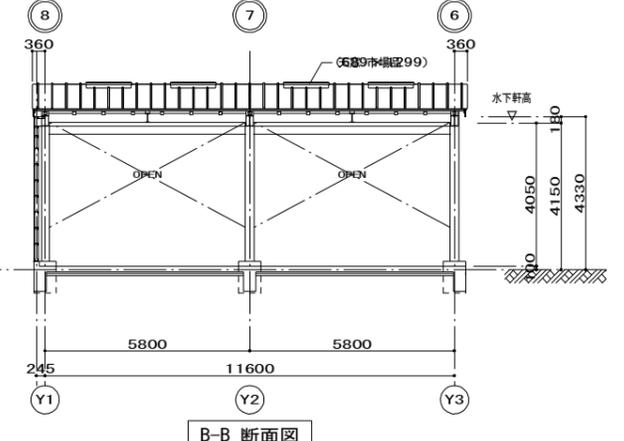
北立面図



西立面図



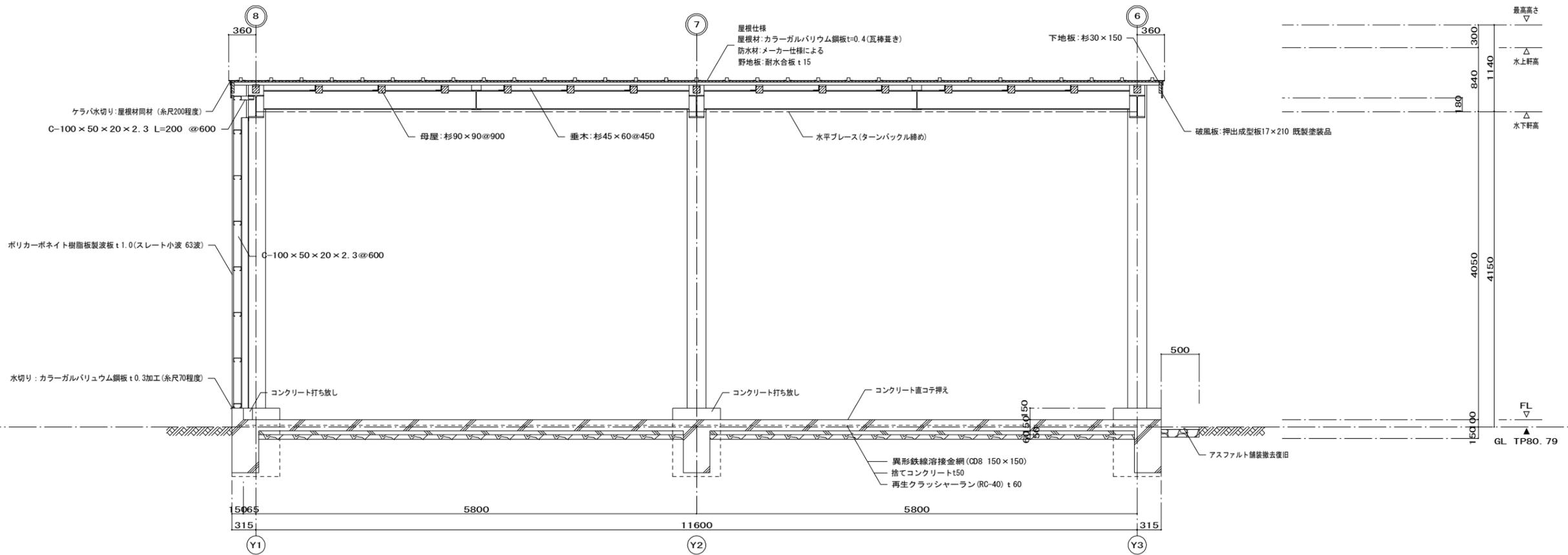
A-A断面図



B-B断面図

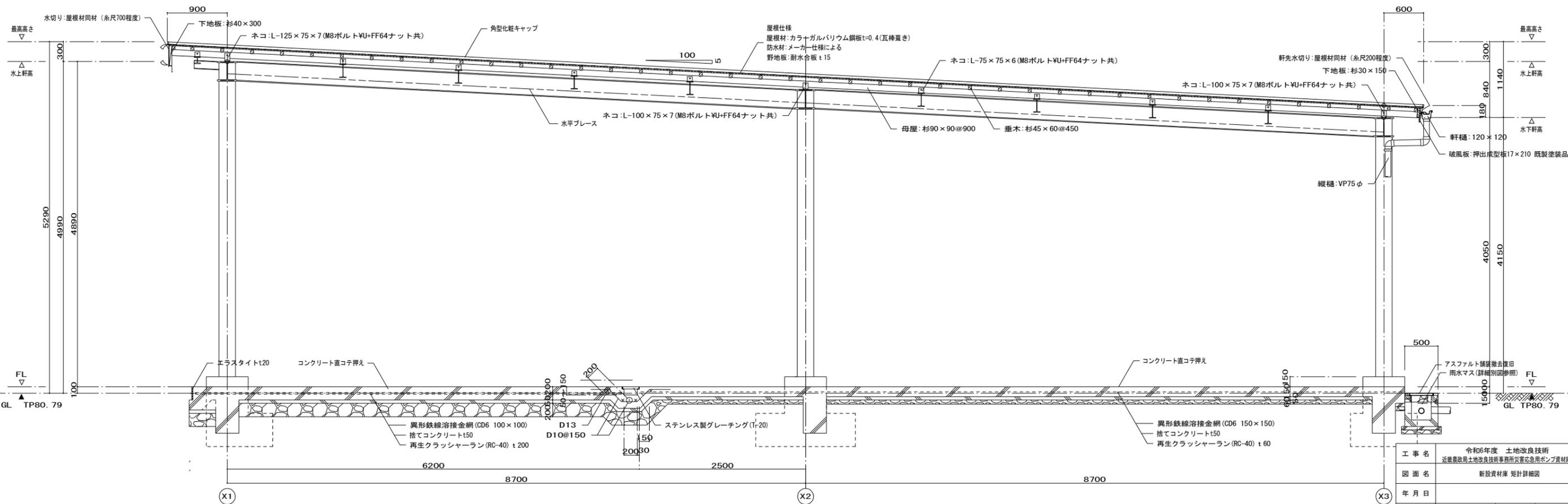
凡例
⊠: 新設資材置場の通り符号を示す。

工事名	令和6年度 土地改良技術 近畿農政局土地改良技術事務所災害応急ポンプ資材庫建築工事		
図面名	新設資材庫 平・立・断面図		
年月日			
尺度	A1: 1/100 A3: 1/200	図面番号	A-10
会社名			
事業(務)所名	近畿農政局 土地改良技術事務所		



新設資材置場B矩計詳細図

※鉄部は全てDP塗装とする。



新設資材置場A, B矩計詳細図

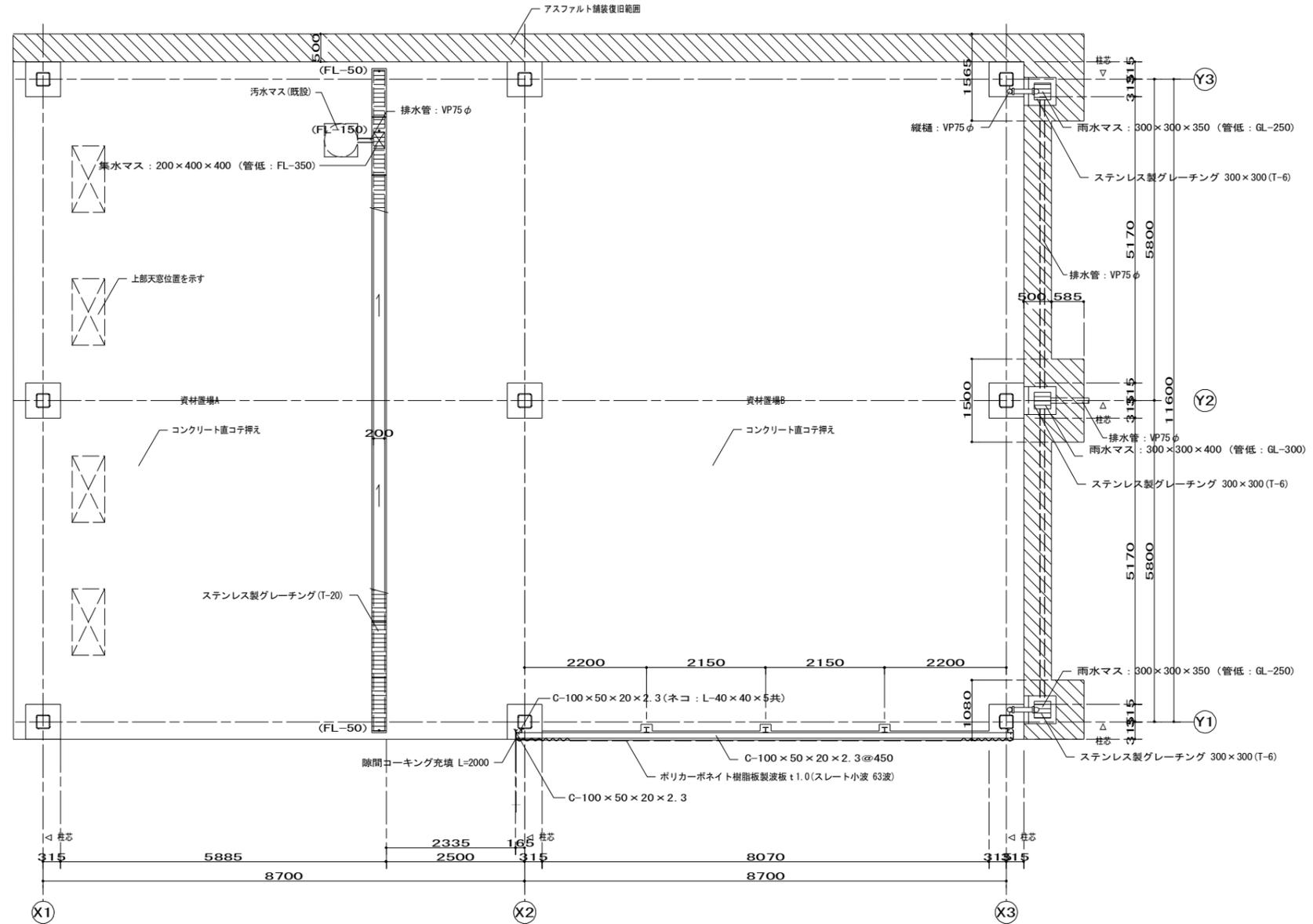
※鉄部は全てDP塗装とする。
木部は全てNP塗装とする。

凡例
 (X1) : 新設資材置場の通り符号を示す。

工事名	令和6年度 土地改良技術 近畿農政局土地改良技術事務所災害応急用ポンプ資材庫建築工事		
図面名	新設資材置場 矩計詳細図		
年月日			
尺度	A1 : 1/30 A3 : 1/60	図面番号	A-11
会社名			
事業(務)所名	近畿農政局 土地改良技術事務所		

一級建築士 大臣登録第301654号 板倉祥浩

新設資材庫 平面詳細図

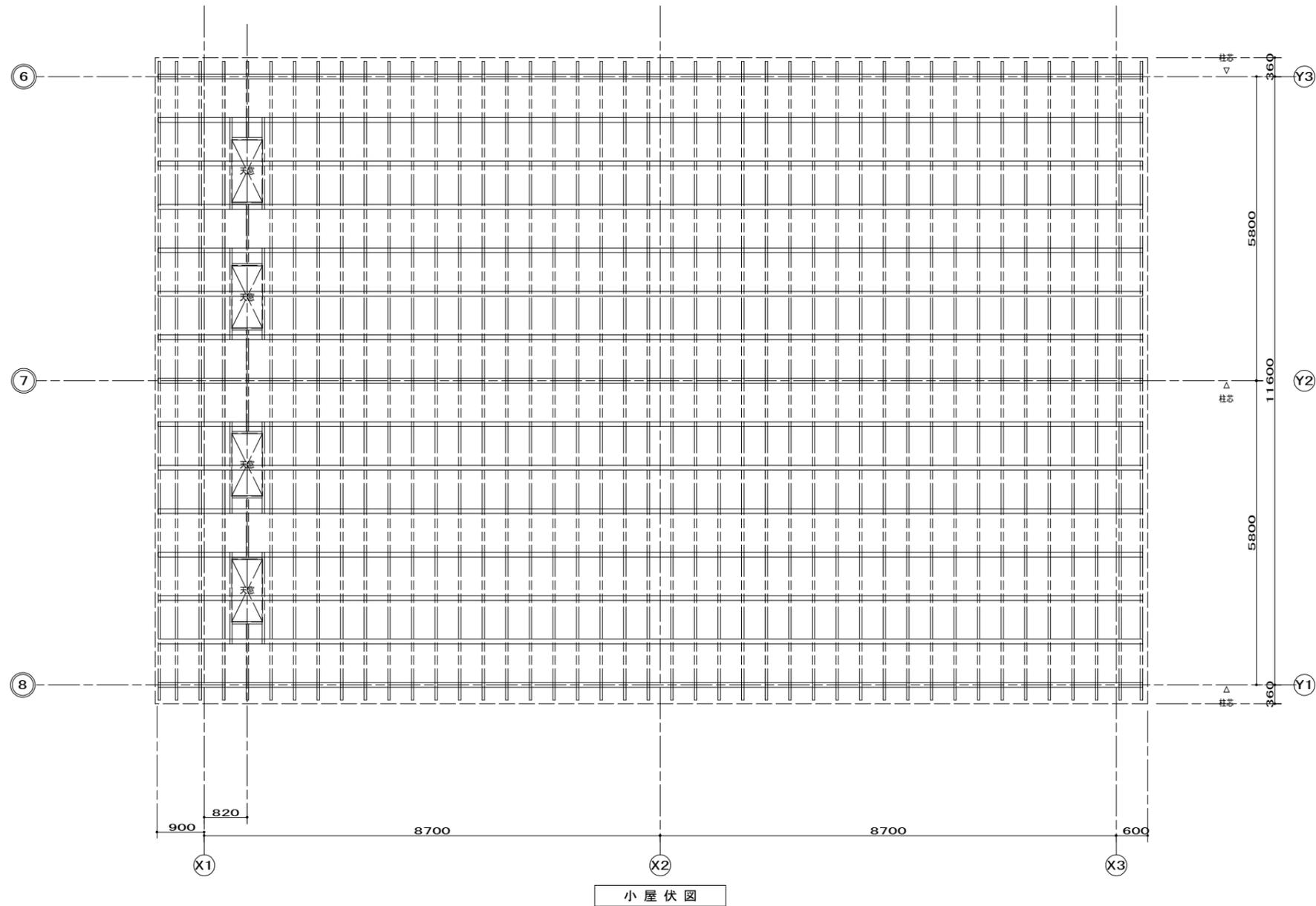


資材庫 平面図
※鉄部は全てPP塗装とする。

凡例
 (X1) : 新設資材置場の通り符号を示す。
 (-100)FLからのレベル差を示す。

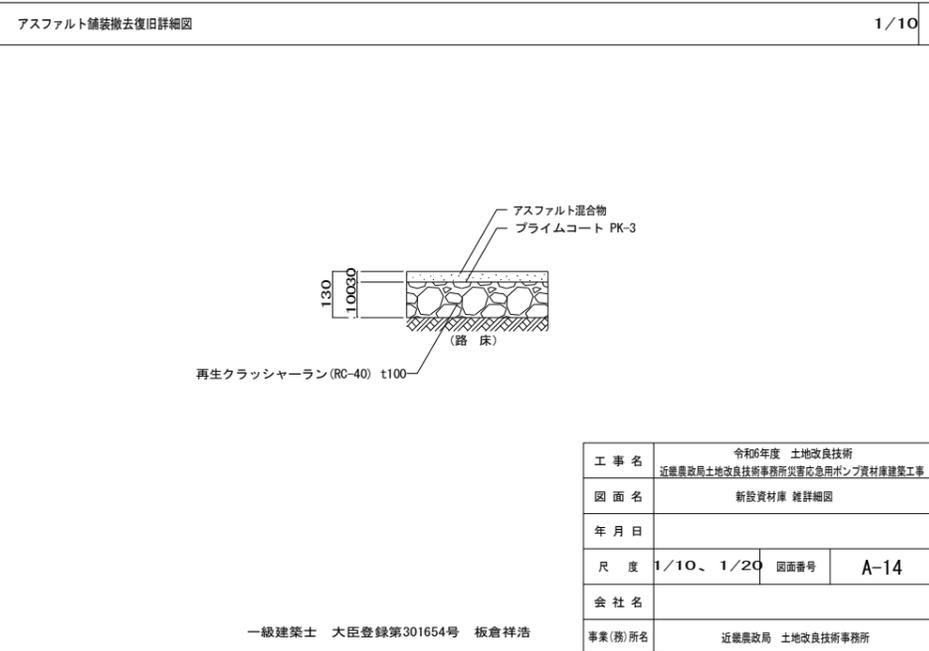
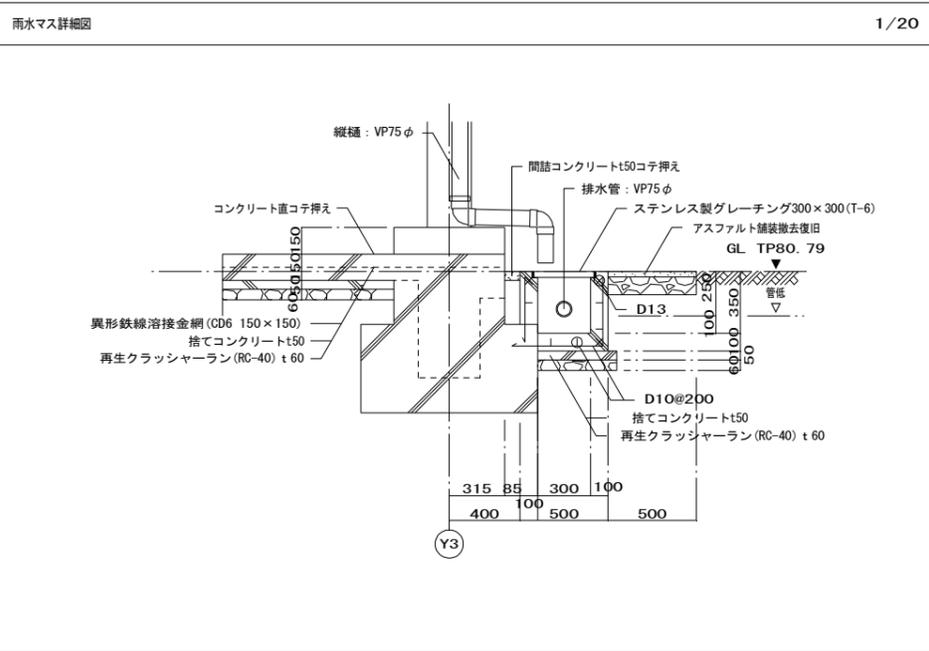
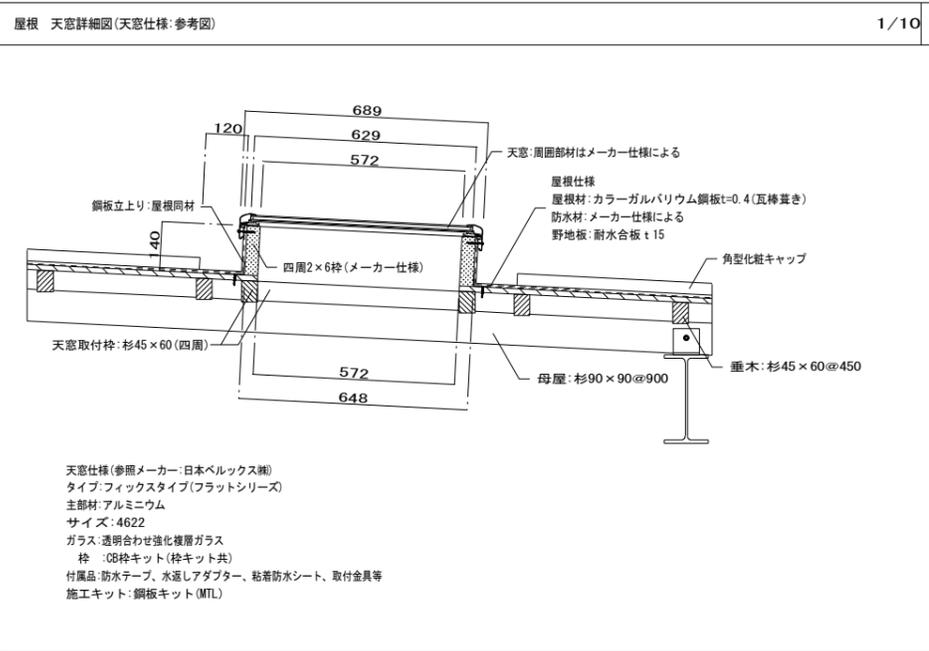
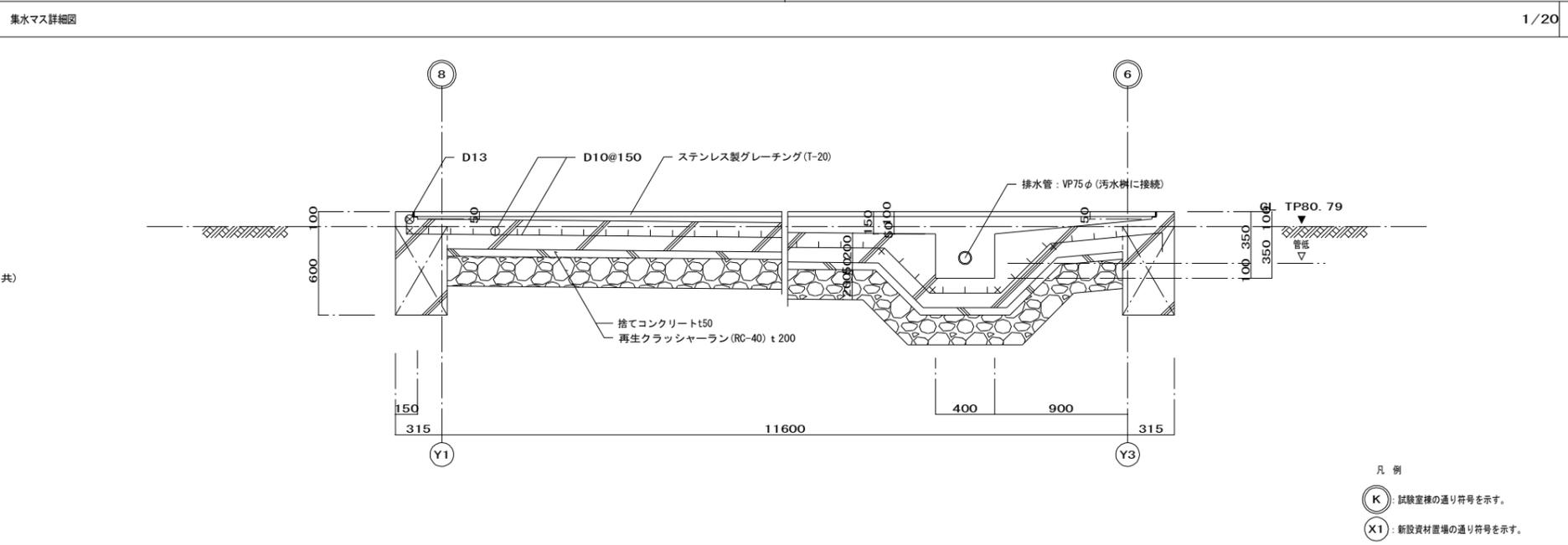
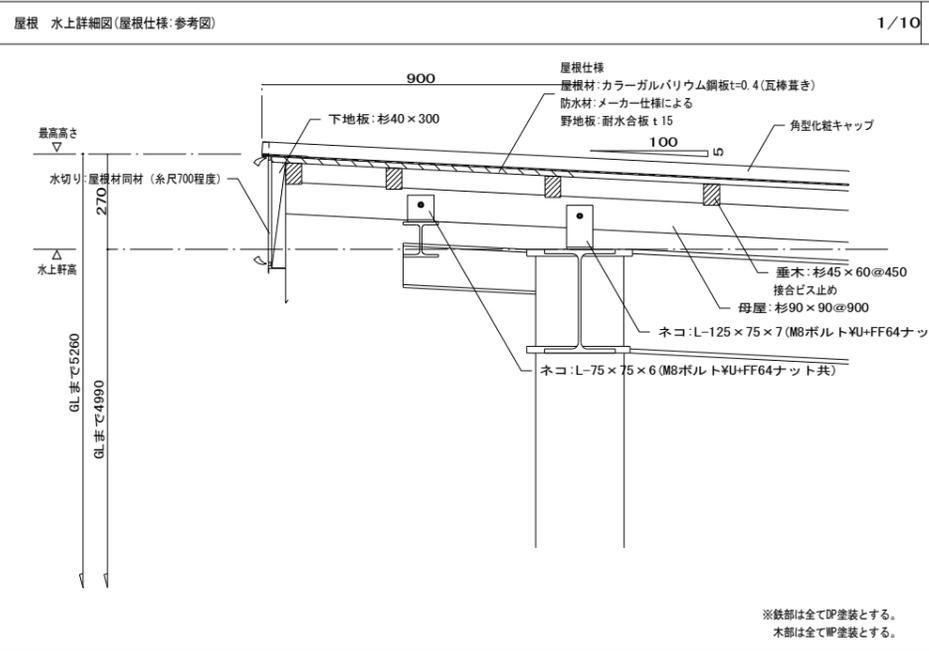
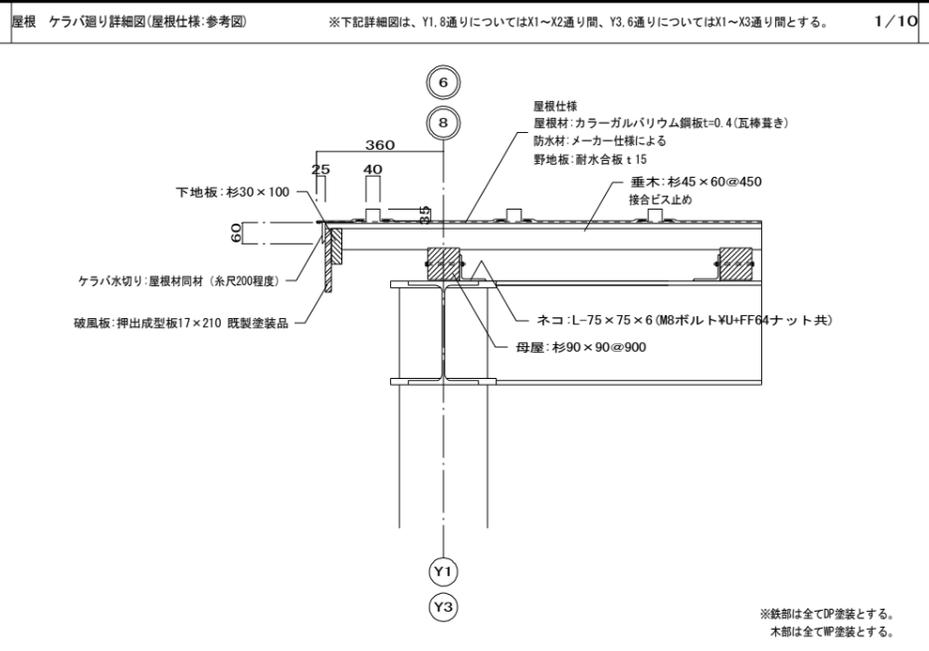
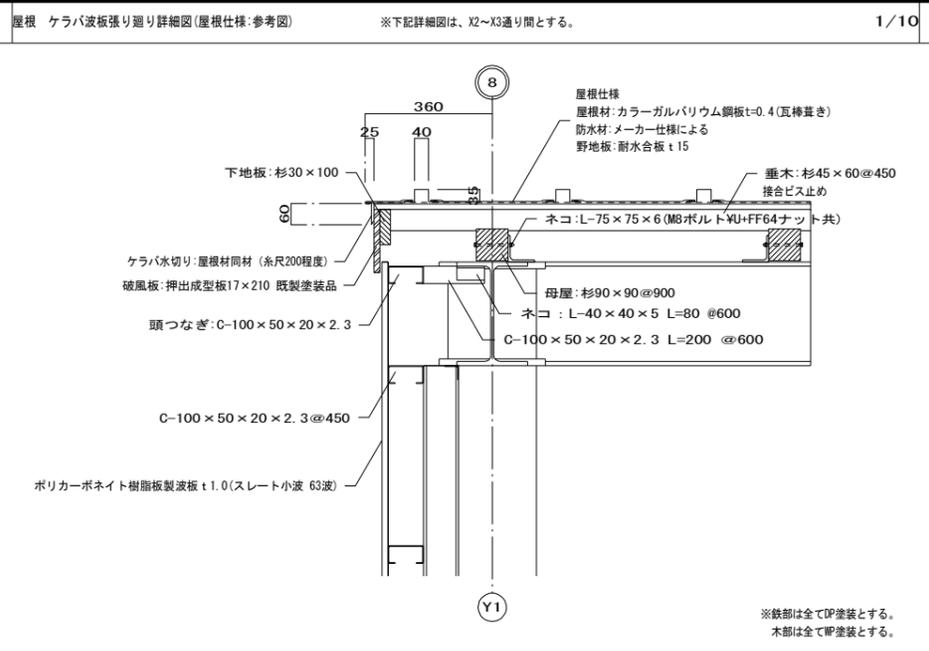
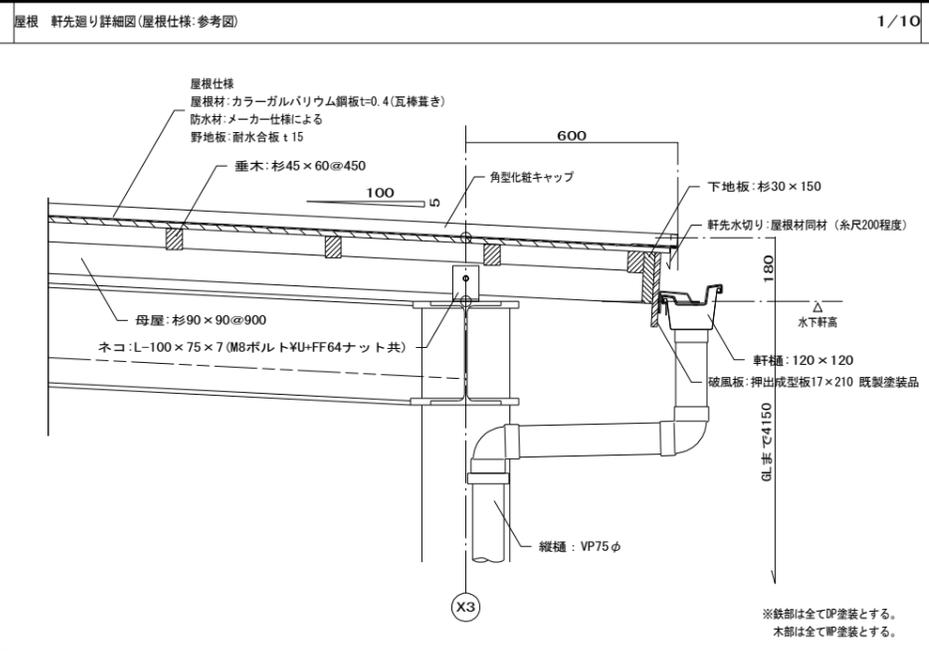
工事名	令和6年度 土地改良技術 近畿農政局土地改良技術事務所災害応急用ポンプ資材庫建築工事		
図面名	新設資材庫 平面詳細図		
年月日			
尺度	A1 : 1/50 A3 : 1/100	図面番号	A-12
会社名			
事業(務)所名	近畿農政局 土地改良技術事務所		

新設資材庫 小屋伏図



- 凡例
- (X1) : 新設資材置場の通り符号を示す。
 - (-100) : Flからのレベル差を示す。
 - ☒ : 天窓 (689 × 1299) 設置範囲を示す
 - : 母屋 (杉 90 × 90 @ 900) 設置範囲を示す
 - : 垂木 (杉 45 × 60 @ 450) 設置範囲を示す

工事名	令和6年度 土地改良技術 近畿農政局土地改良技術事務所災害応急用ポンプ資材庫建築工事		
図面名	新設資材庫 小屋伏図		
年月日			
尺度	A1 : 1/50 A1 : 1/100	図面番号	A-13
会社名			
事業(務)所名	近畿農政局 土地改良技術事務所		



構造特記仕様書

§1 一般事項
選択項目は○印を適用し、◎印が無い場合は*印を適用する。
○印が複数ある場合は、共に適用する。

- 1-1 使用材料は原則としてJIS規格品、JAS規格品、又は大臣認定品とする。
1-2 設計図書は優先順位は下記による。
1) 本特記仕様書
2) 設計図
3) 標準図
4) 仕様書
5) 日本建築学会標準仕様書

§2 構造計算ルート

Table with columns: 方向, 構造計算ルート. Rows for X and Y directions.

2-2 鉄筋の継手
構造計算ルート別による主筋又は、耐力壁の鉄筋の継手の重ね長さ
* 建築基準法施行令第73条第2項による仕様規定(以下令73条の仕様規定)
* 日本建築学会 JASS5(2018)、鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説
* 日本建築学会 RC規程2018
XY両方向共ルート3及び限界耐力計算の場合は、令第73条の仕様規定によらずJASS5(2018)、鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説及びRC規程2018とすることができる。

§3 仮設工事、土工

- 3-1 山留め、根切り
3-2 埋戻し土、盛土、残土処分
埋戻し土 * 根切り土の中の良土 * 搬入良土
盛土 * 根切り土の中の良土 * 搬入良土(盛土は30cm毎に転圧締めを行うこと)
残土処分 * 場内均し * 場外搬出処分(自由 * 指定場所)

§4 地業工事

Table for foundation and slab ground work. Columns: 場所, 捨てコンクリート厚さ, A: 砕石, B: 割栗石, 厚さ.

注(1) アンカーボルト支持用フレームの、あと施工アンカーを打込む部分は100以上とする。
(2) 端部aは100以上とする。
4-2 設計地耐力
長期 100 kN/m^2 短期 200 kN/m^2 終局 KN/m^2
地耐力載荷試験 * 行う (箇所、長期設計耐力の3倍を確認する) * 行わない
4-3 地盤改良
* 無筋コンクリート地業 * 締固め工法 * ソイルセメント杭(既工事にて実施済)
* セメント系固化工材投拌 * 圧密排水工法
[* 載荷試験 * 一軸圧縮試験 * 行う (1箇所) * 行わない]
[* 六価クロム溶出試験] * 行う * 行わない

- 4-4 既製コンクリート杭、鋼管杭、その他特殊杭
1) 杭種
* PHC杭 * A種 * B種 * C種
* ST杭 * A種 * B種 * C種
* SCR杭 t=9mm
* PRC杭 * I種 * II種 * III種 * IV種
2) 工法
* 打撃工法 * 油圧ハンマー * ディーゼルハンマー
* 埋込み工法 * プレパリングメント注入工法 * BFK工法(認定工法)
* プレパリング拡大掘削工法(認定工法)
杭間定深 * あり * なし
* イーゼット工法

Table for concrete strength design data. Columns: 経径mm, 長期N, 短期N, 終局N, 本数, 備考.

- 4) 杭の構成は設計図に示す。
5) 杭間補強
* かご筋 * スタッド溶接 * 鉄外周溶接
4-5 場所打設鉄筋コンクリート杭、場所打設鋼管コンクリート杭
1) 工法
* アースドリル工法 * 低密アースドリル工法
* リバース工法 * オールケーシング工法 (*ペント工法)
* 既工法

Table for concrete strength design data. Columns: 経径(注度部)mm, 厚層mm, 長期N, 短期N, 終局N, 本数, 備考.

- 3) 杭先端深さ * 既 * 杭リストによる * 杭伏図による
4) 孔壁測定 (2方向)
* 行う * 全数 * % * 行わない
5) 使用材料
コンクリートの仕様は設計図による。特記のない場合JASS5水中コンクリートによる。
コンクリート Fc (* 普通ポルトランドセメント * 高炉セメント)
鉄筋 D 以下 SD295A * D 以上 SD45
D 以上 SD390
鋼管(リブ付) * SSK400 * SSK400
6) 載荷試験 * 行う (箇所、長期設計耐力の3倍を確認する) * 行わない
7) 圧入率 * 行う * 行わない

§5 鉄筋工事

Table for reinforcement materials. Columns: 種類, 径, 継手. Rows for SD295A, SD345, SD390, SD490, and high-strength reinforcement.

5-2 ガス圧接部の検査(第三者機関による)外観検査全数(引張り試験の場合、施工者自主検査でもよい)
* 抜取り検査
* 引張り試験(JISZ3120)
1検査ロットにつき * 3本 * 原則 柱・梁の径毎に3本
◎ 超音波探傷試験 (JISZ3062) * 熱間押抜き試験
1検査ロットにつき * 30箇所
o 不合格となった圧接部は切り取って再圧接を行う。また残り全数に対して超音波探傷試験を行う。
1検査ロットは1組の作業班が1日に施工した圧接箇所の数量で200箇所以内

5-3 溶接、機械式継手の検査は各々の認定方法による他、日本継手協会仕様書(2017年)及び下記を参照する。
JIS Z 3063 (鉄筋コンクリート用異形棒鋼溶接部の超音波探傷試験方法及び判定基準)
JIS Z 3064 (鉄筋コンクリート用機械式継手の鉄筋挿入長さの超音波測定試験方法及び判定基準)

5-4 梁貫通補強
補強筋は原則として工場製品(評定品)を使用する。
5-5 その他
基礎梁、基礎小梁の継手及び定着は原則として ◎1一般 * 2地反力を受ける * 3上載荷重が大きい場合 とする。
梁の余長Lの採用 大梁・小梁 * D' (梁有効効) * 端部上下筋15d 中央上下筋20d
基礎梁 * min(D', Lz) * 端部上下筋15d 中央上下筋20d
鉄筋の組立は適切な位置にスベークを使用し、組立後は形状保持のための養生を行う。
コンクリートを2回打する部材は、初回の打設後に鉄筋の清掃を行う。
コンクリート打設前に工事監理者の検査を受け不備な箇所は修正を行う。

§6 コンクリート工事

- 6-1 レディーミクストコンクリート(JIS A5308-2019)
1) セメント * 普通ポルトランドセメントJISR5210 * 高炉セメントB種 * 低熱ポルトランドセメントJISRS210
2) 粗骨材 * 砂利 * 砕石 * 高炉スラグ骨材 * 人工軽量骨材 * 再生骨材
最大径(mm) * 20 * 25 * 40
3) 設計基準強度 (N/mm^2) (使用区分は設計図の軸組図に示す)
* 普通コンクリート
* Fc18 ◎ Fc21 * Fc24 * Fc27 * Fc30 * Fc * Fc
* 軽量コンクリート(* 1種 * 2種 気乾単位容積質量 * 18.5 *)
* LFc18 * LFc21 * LFc24 * LFc27 * LFc30 * LFc

- 4) 土間コンクリート ◎ Fc18 (ただし柱・壁等と同時に打込む場合は躯体の強度とする)
5) 捨てコンクリート ◎ Fc18
6) 防水押さえコンクリート * Fc * LFc (気乾単位容積質量 * 18.5 *)
7) かさ上げコンクリート * Fc * LFc (気乾単位容積質量 * 18.5 *)
6-2 混和材 *AE減水剤 * 高性能AE減水剤 * 躯体防水材 * 膨張材
注1. 混和剤は所定の品質を確保するためにプラントの特性に応じたものを使用する。

Table for concrete mix proportions. Columns: 箇所, 基礎・基礎梁, 一般, 備考. Rows for Slab, Water-cement ratio, Unit water, Unit cement.

- 6-4 試験(躯体コンクリートの28日圧縮試験は公的機関において行う)
1) 骨材 [◎ 塩分含有量 ◎ アルカリシリカ反応性 * 行う * 行わない]
2) フレッシュコンクリート [◎ スランプ ◎ 空気量] * 行う * 行わない
3) 躯体のせき板取り外し時期決定圧縮試験 * 行う * 行わない
4) コンクリートコア抜き取り圧縮試験 * 行う * 行わない
5) マスコンクリートのひび割れ照査(温度応力解析) * 行う * 行わない
6) 単位水量測定 * 行う ◎ 行わない

6-5 調査(補正値は工事費に含む)
計画供用期間の級()は耐久設計基準強度Fd
* 短期(18) ◎ 標準(24) * 長期(30) * 超長期(36)
調査管理強度 Fm=Max(Fc, Fd)+S S=3~6
計画28日の調査強度Fは下記の式で満足するものとする。
F≧Fm+1.73σ F≧0.85Fm+3σ

Table for curing periods. Columns: 基礎・梁側・柱・壁, スラブ下, 梁下. Rows for concrete curing, temperature, and compression test.

6-7 住宅性能表示
劣化等級 * 等級2 * 等級3
劣化等級2又は3を指定する場合は、鉄筋コンクリート構造配筋標準図(1)2-7かぶり厚さが変わる為、かぶりを訂正又は、設計図に明示する
6-8 Fc36を超える高強度コンクリートは別記特記仕様書(JASS5等)による。

§7 鉄骨工事

Table for steel work materials. Columns: 規格名称, 鋼材名, 柱, 通しダイア, 内, 大梁, フレース, 小梁. Rows for various steel types and profiles.

Table for high-strength bolts. Columns: 高力ボルトの種類, 使用箇所. Rows for Torlonia and JIS high-strength bolts.

- 7-3 普通ボルト、アンカーボルト
1) 材質 ◎ SS400 * SS490 (M以上) * ABR400 * ABR490 * ABM400 * ABM490 (ABMはM24以上)
2) 大臣認定柱脚(メーカー仕様による) ◎ 使用する * 使用しない

Table for high-strength bolts. Columns: 径, 長さ(mm), 使用箇所. Rows for 13φ, 16φ, 22φ bolts.

- 7-5 溶接材料
1) アーク溶接に使用する溶接棒、ワイヤ及びフラックスは母材の種類、寸法、及び溶接条件に相応したものを選定する。
2) ガスシールドアーク溶接に使用するシールドガスは溶接に相応したものとする。
スカラップ形状 * スカラップ工法 ◎ ノンスカラップ工法

Table for steel joints. Columns: フランジ, ウェブ, 柱, 梁. Rows for high-strength bolts and on-site welding.

- 7-8 溶接手法及び管理
1) 使用する溶接ワイヤー、入熱量及びバス間温度等の仕様については鉄建協又は全構協の仕様で、専任の溶接施工管理技術者により管理を行うこと。
2) 本工事で代替タブを使用する場合は、代替タブ溶接技能者技量検定付加試験等 * 行わない
3) 鋼検査(工場・現場・代替タブ)の有資格者で、工事監理者の承諾を受けた者は技量検定付加試験を免除する。

- 7-9 テッキプレート(単位 mm)
1) 床用 高さ * 板厚 *
2) 合成スラブ用 高さ * 板厚 *
3) 型枠用 高さ * 板厚 * 形板 タイプ
4) 防錆処理 * プライマー * 亜鉛メッキ * Z12 * Z27

Table for coatings. Columns: 適用(屋外/室内), 塗料, 種別, 標準膜厚. Rows for various coating types and products.

- 3) 融融亜鉛メッキ * 行う ◎ 行わない
4) 常温亜鉛メッキ * 行う * 行わない
5) 高耐食メッキ鋼板(t3.2mm以下) * 用いる ◎ 用いない

- 7-11 溶接部の検査(受入検査) * 行う * 行わない
1) 受入検査を行う第三者検査機関は、建築主、設計者、工事監理者又は工事施工者(元請)との直接契約による。
2) 第三者検査機関は(社)日本溶接協会によるCIV検査事業者認定種別における超音波探傷検査部門の認定を取得した事業者とし、当該工事の鉄骨製作工場の社内検査を行っていない事業者とする。
3) 受入検査は目視による外観検査と超音波探傷検査とし、社内検査完了後に行う。
4) 外観検査の合格判定は国土交通省告示1464号による。ただし告示に定めのないものは日本建築学会「JASS6 鉄骨工事 2018 付則6 鉄骨鋼検査基準」の限界許容差による。
5) 超音波探傷検査は日本建築学会「鋼構造建築溶接部の超音波探傷検査規程・同解説」2018により、合格判定は7.2.1条を考慮しない溶接部のうち、引張応力が作用する溶接部の項を適用する。
6) 溶接箇所数の数え方は「JASS6 鉄骨工事 2018」表10.1溶接箇所数の数え方による。
7) 受入検査の抜取り方法及び抜取り率は以下による。

- a) 工場溶接の場合
i. 検査ロットは各部、各工区毎に溶接箇所300箇所以内で構成する。
ii. 抜取り数は各ロット毎に30箇所をランダムにサンプリングする。
iii. 大きさ30箇所のサンプル中の不適合個数が1個以下のときはロットを合格とし、4個以上のときはロットを不合格とする。ただし、サンプル中の不適合数が1個を超え4個未満のときは、同じロットからさらに30箇所のサンプルを抜取検査する。総計60箇所のサンプルについての不適合個数の合計が4個以下のときはロットを合格とし、5個以上のときはロットを不合格とする。
b) 現場溶接の場合
i. 全数検査とする。
ii. 抜取り数は各ロット毎に溶接部はすべて補修を行い、再検査して合格とならなければならない。
iii. すれ・食い違いの補修方法は、独立行政法人 建築研究所監修「突き合せ継手の食い違いのずれの検査・補強マニュアル」による。

Table for steel work approval. Columns: S, H, M, R, J. Row for approval by the Minister of Land, Infrastructure, and Transport.

§8 コンクリートブロック・ALCパネル・押出成形セメント板・PCa板工事

Table for concrete blocks and ALC panels. Columns: 1)種類, 2)厚さmm, 3)外壁取付け構法. Rows for concrete blocks and ALC panels.

Table for PCa board. Columns: 方向, 構法, 使用箇所, 備考. Rows for PCa board types.

Table for PCa board. Columns: 方向, 構法, 使用箇所, 備考. Rows for PCa board types.

Table for PCa board. Columns: 方向, 構法, 使用箇所, 備考. Rows for PCa board types.

Table for PCa board. Columns: PCa板厚さmm, 現場打厚さmm, 合計厚さmm, 備考. Rows for PCa board types.

Table for PCa board. Columns: 方向, 構法, 使用箇所, 備考. Rows for PCa board types.

Project information form including: 工事名 (令和6年度 土地改良技術 近畿農政局土地改良技術事務所災害応急用ポンプ資材庫建築工事), 図面名 (新設資材庫 構造特記仕様書), 年月日, 尺度, 図面番号 (S-01), 会社名, 事業(務)所名 (近畿農政局 土地改良技術事務所).

構造関係共通事項

1. 総則

1. 1 適用範囲

- (1) 構造関係共通図(配筋標準図)は、鉄筋コンクリート及び鉄骨鉄筋コンクリート造等における鉄筋の加工、組立等の一般的な標準図を表わす。
- (2) 構造関係共通図(鉄骨標準図)は、鉄骨造及び鉄骨鉄筋コンクリート造における鉄骨の加工、組立の一般的な標準図を表わす。
- (3) 構造関係共通図(配筋標準図、鉄骨標準図)以外については、図面及び監督職員の指示による。

1. 2 優先順位

- (1) 設計図書間で配筋方法に相違がある場合の優先順位は以下のとおりとする。
 - 建築工事特記仕様書(構造関係)
 - 図面 2-1 下記 2-2 以外の図面
 - 2-2 構造関係共通図(配筋標準図、鉄骨標準図)
 - 国土交通省大臣官房官庁営繕部制定「公共建築工事標準仕様書(建築工事編)」(令和4年版)」

1. 3 用語の定義

- (1) 設計図とは、建築構造図のうち特記仕様書、構造関係共通図以外の図面をいう。
- (2) 異形鉄筋の径(本文、図、表において「D、d」で示す)は、呼び名に用いた数値とする。
- (3) 長さ、厚さ等の単位は、特記がなければmmとする。

1. 4 記号等

設計図中で使用する記号は、表1~表8、図1を標準とする。

表1 鉄筋の断面表示

区分	径	D10	D13	D16	D19	D25	D29	D32
建築		●	×	○	○	○	⊗	⊙

表2 各階伏図における記号

記号	説明	記号	説明
○ ⁵	スラブの配筋種別	○	杭の位置
◇	スラブ厚さ	●	試験杭の位置
○	階段の配筋種別	▨	打増しの範囲
○ ^{D0}	土間コンクリート	⊠	スラブ開口
□	コンクリートブロック壁(CB壁)	○	ポーリング位置
▨	梁・スラブの上がり下がり範囲	(±)	FLからの上がり下がり
EW○○	耐力壁の種別	W○○	一般壁の種別
EW○○	片持スラブ形階段を受け、かつ耐力壁の種別	KW○○	片持スラブ形階段を受け、かつ耐力壁の種別
EW○○	土圧を受け、かつ耐力壁の種別		

表3 貫通孔記号

区分	径	50	75	100	125	150	175	200	225	250	275	300	325	350	375	400
建築		○	×	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

表4 スリーブ材質の凡例

管名	鋼管	溶融亜鉛めっき鋼板	硬質塩化ビニル管(薄肉管)	つば付き鋼管(黒管)
記号(建築用)	SP(白管)	GA	VU	RS

建築用以外のスリーブ材質は各工事による。

表5 高力ボルト径の記号

区分	径	M12	M16	M20	M22	M24
高力ボルト(F10T、S10T)		●	●	●	●	●
溶融亜鉛めっき高力ボルト(F8T相当)						

表6 普通ボルト径の記号

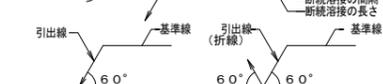
区分	径	M12	M16	M20	M22	M24
普通ボルト		○	○	○	○	○

表7 溶接方法、溶接継手及び溶接面の分類記号

溶接継手	完全溶込み溶接		突合わせ継手	記号
	隅肉溶接		T型継手	B
溶接面	部分溶込み溶接		かど継手	L
	重ねアーク溶接(フレア溶接)			F
	片面溶接	両面溶接		P
				F
				1
				2

表8 溶接の補助記号

区分	補助記号
現場溶接	▲
全周溶接	○
全周現場溶接	○
断面溶接の長さ及び間隔	L-P



※特記無き限り、完全溶込み溶接の溶接方法・溶接面は適切な溶接方法等による。図1 溶接記号の記載例

標準仕様書 5章 鉄筋工事 3節 加工及び組立よりの抜粋

5. 3. 2 加工

- (2) 次の部分に使用する異形鉄筋の末端部にフックを付ける。
 - (ア) 柱の四隅にある主筋の重ね継手及び最上階の柱頭
 - (イ) 梁の出隅及び下端の両隅にある梁主筋の重ね継手(基礎梁を除く。)
 - (ウ) 煙突の鉄筋(壁の一部となる場合を含む。)
 - (エ) 杭基礎のベース筋
 - (オ) 帯筋、あばら筋及び幅止め筋

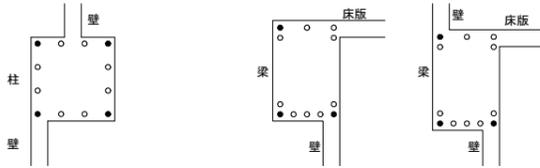


図3.3 (5.3.2(2)の解説) 末端部にフックを必要とする出隅部の鉄筋(●印)

- (3) 鉄筋の折曲げ形状及び寸法は、表5.3.1による。なお、異形鉄筋の径(この節の本文、図及び表において「d」で示す)は、呼び名に用いた数値とする。

表5.3.1 鉄筋の折曲げ形状及び寸法

折曲げ角度	折曲げ図	折曲げ内法直径(D)		
		鉄筋の種類	SD295A、SD295B、SD345	SD390
180°		呼び名	D16以下	D19~D38
		鉄筋の種類	SD295A、SD295B、SD345	SD390
135°		呼び名	3d以上	4d以上
		鉄筋の種類	SD295A、SD295B、SD345	SD390
90°		呼び名	3d以上	4d以上
		鉄筋の種類	SD295A、SD295B、SD345	SD390
135°及び90°(幅止め筋)		呼び名	4d以上	4d以上
		鉄筋の種類	SD295A、SD295B、SD345	SD390

- (注) 1. 片持スラブ先端、壁筋の自由端側の先端で90°フック又は135°フックを用いる場合には、余長を4d以上とする。
- 2. 90°未満の折曲げの内法直径は特記による。

5. 3. 4 継手及び定着

- (1) 鉄筋の継手は、重ね継手、ガス圧接継手、機械式継手又は溶接継手とし、適用は特記による。
- (2) 鉄筋の継手位置は、特記による。
- (3) 鉄筋の重ね継手は、次による。
 - なお、径が異なる鉄筋の重ね継手の長さは、細い鉄筋の径による。
 - (ア) 柱及び梁の主筋並びに耐力壁の鉄筋の重ね継手の長さは、特記による。特記がなければ、耐力壁の鉄筋の重ね継手の長さは、40d(軽量コンクリートの場合は50d)又は表5.3.2の重ね継手の長さのうちいずれか大きい値とする。
 - (イ) (ア)以外の鉄筋の重ね継手の長さは、表5.3.2による。

表5.3.2 鉄筋の重ね継手の長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm ²)	L ₁ (フックなし)	L ₂ (フックあり)
SD295A SD295B	18	45d	35d
	21	40d	30d
	24, 27	35d	25d
SD345	18	50d	35d
	21	45d	30d
	24, 27	40d	30d
SD390	18	50d	35d
	21	45d	30d
	24, 27	40d	30d

- (注) 1. L₁、L₂：重ね継手の長さ及びフックありの重ね継手の長さ
- 2. L₂は、図5.3.1に示すようにフック部分を含まない。
- 3. 軽量コンクリートの場合は、表の値に5dを加えたものとする。

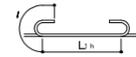


図5.3.1 フックありの重ね継手の長さ

- (4) 隣り合う継手の位置は、表5.3.3による。ただし、スラブ筋でD16以下の場合及び壁筋の場合は除く。なお、先組み工法等で、柱及び梁の主筋のうち、隣り合う継手を同一箇所には除く場合は、特記による。

表5.3.3 隣り合う継手の位置

重ね継手	フックありの場合	隣り合う継手の位置	
		L ₁	L ₂
重ね継手	フックなしの場合	a = 0.5L ₁	a ≥ 0.5L ₁
		a = 0.5L ₁	a ≥ 0.5L ₁
溶接継手	溶接継手・溶接継手	a ≥ 400mm	
機械式継手	カプラー	a ≥ 400mm, かつ, a ≥ (b + 40)mm	

- (5) 鉄筋の定着は、次による。

- (ア) 鉄筋の定着の長さは、特記による。特記がなければ、表5.3.4による。

表5.3.4 鉄筋の定着の長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm ²)	直線定着の長さ				フックあり定着の長さ			
		L ₁	L ₂	L ₃	L ₄	L ₁	L ₂	L ₃	L ₄
SD295A SD295B	18	45d	40d	10d	35d	30d	10d	30d	25d
	21	40d	35d	10d	30d	25d	10d	25d	20d
	24, 27	35d	30d	10d	25d	20d	10d	20d	15d
SD345	18	50d	40d	10d	35d	30d	10d	30d	25d
	21	45d	35d	10d	30d	25d	10d	25d	20d
	24, 27	40d	35d	10d	25d	20d	10d	20d	15d
SD390	18	50d	40d	10d	35d	30d	10d	30d	25d
	21	45d	35d	10d	30d	25d	10d	25d	20d
	24, 27	40d	35d	10d	25d	20d	10d	20d	15d

- (注) 1. L₁、L₂：2から4.まで以外の直線定着の長さ及びフックありの定着の長さ
- 2. L₃、L₄：割裂破壊のおそれのない箇所への直線定着の長さ及びフックありの定着の長さ
- 3. L₃：小梁及びスラブの下端筋の直線定着の長さ。ただし、基礎耐圧スラブ及びこれを受ける小梁を除く。
- 4. L₄：小梁の下端筋のフックありの定着の長さ
- 5. フックありの定着の場合は、図5.3.2に示すようにフック部分を含まない。また、中間部での折曲げは行わない。
- 6. 軽量コンクリートの場合は、表の値に5dを加えたものとする。

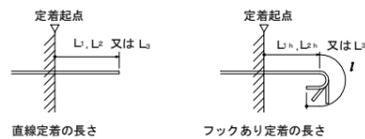


図5.3.2 直線定着の長さ及びフックありの定着の長さ

- (イ) 仕口面に縦に折り曲げて定着する鉄筋の定着長さsが、表5.3.4のフックありの定着の長さを確保できない場合の折曲げ定着の方法は、特記による。特記がなければ、図5.3.3により、次の(a)から(c)までを全て満足するものとする。
 - (a) 全長は、表5.3.4の直線定着の長さ以上とする。
 - (b) 余長は8d以上とする。
 - (c) 仕口面から鉄筋外面までの投影定着長さLa及びLbは、表5.3.5に示す長さとする。ただし、梁主筋の柱内定着においては、柱せいの3/4倍以上とする。

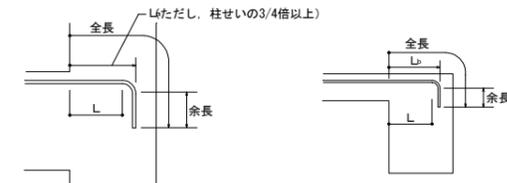


図5.3.3 折曲げ定着の方法

表5.3.5 投影定着長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm ²)	L _a	L _b
SD295A SD295B	18	20d	15d
	21	15d	15d
	24, 27	15d	15d
SD345	18	20d	20d
	21	20d	20d
	24, 27	20d	15d
SD390	18	20d	20d
	21	20d	20d
	24, 27	20d	20d

- (注) 1. L_a：梁主筋の柱内折曲げ定着の投影定着長さ(基礎梁、片持梁及び片持スラブを含む。)
- 2. L_b：小梁及びスラブの上端筋の梁内折曲げ定着の投影定着長さ(片持小梁及び片持スラブを除く。)
- 3. 軽量コンクリートの場合は、表の値に5dを加えたものとする。

- (6) 溶接金網及びスパイラル筋の継手及び定着は、次による。
- (7) 溶接金網の継手及び定着は、図5.3.4による。なお、L₁は表5.3.2に、L₂及びL₃は表5.3.4による。

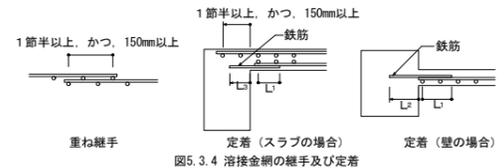


図5.3.4 溶接金網の継手及び定着

- (イ) スパイラル筋の継手及び定着は、図5.3.5による。

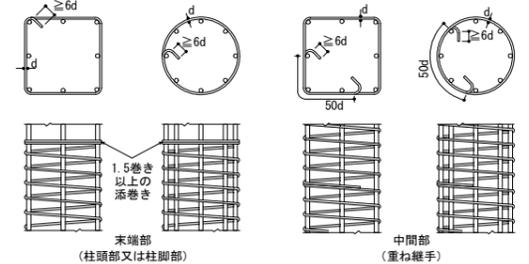


図5.3.5 スパイラル筋の継手及び定着

5. 3. 5 鉄筋のかぶり厚さ及び間隔

- (1) 鉄筋及び溶接金網の最小かぶり厚さは、特記による。特記がなければ、表5.3.6による。ただし、柱及び梁の主筋にD29以上を使用する場合は、主筋のかぶり厚さを径の1.5倍以上確保するように最小かぶり厚さを定める。

表5.3.6 鉄筋及び溶接金網の最小かぶり厚さ

土に接しない部分	構造部分の種別		最小かぶり厚さ
	スラブ	仕上げあり	20
土に接する部分	耐力壁以外の壁	仕上げなし	30
		柱、梁、耐力壁	30
	柱、梁、耐力壁	屋内	30
		屋外	30
		仕上げあり	30
	煙突等高温を受ける部分	擁壁、耐圧スラブ	40
基礎、擁壁、耐圧スラブ		60	

- (注) 1. この表は、普通コンクリートに適用し、軽量コンクリートには適用しない。また、塩害を受けるおそれのある部分等耐久性上不利な箇所には適用しない。
- 2. 「仕上げあり」とは、モルタル塗り等の仕上げのあるものとし、鉄筋の耐久性上有効でない仕上げ(仕上塗材、塗装等)のものを除く。
- 3. スラブ、梁、基礎及び擁壁で、直接土に接する部分のかぶり厚さには、接コンクリートの厚さを含まない。
- 4. 杭基礎の場合の基礎下端筋のかぶり厚さは、杭先端からとする。

- (2) 柱、梁等の鉄筋の加工に用いるかぶり厚さは、最小かぶり厚さに10mmを加えた数値を標準とする。
- (3) 鉄筋組立後のかぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。
- (4) 鉄筋相互のあきは図5.3.6により、次の値のうち最大のもの以上とする。ただし、機械式継手及び溶接継手の場合は、5節又は6節による。
- (ア) 粗骨材の最大寸法の1.25倍
- (イ) 25mm
- (ウ) 隣り合う鉄筋の径 標準仕様書(5.3.2(3)によるd)の平均の1.5倍



図5.3.6 鉄筋相互のあき及び間隔

- (5) 鉄骨鉄筋コンクリート造の場合、主筋と平行する鉄骨とのあきは、(4)による。
- (6) 貫通孔に接する鉄筋のかぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。

工事名	令和6年度 土地改良技術 近畿農政局土地改良技術事務所災害応用ポンプ資材庫建築工事
図面名	新設資材庫 構造関係共通事項
年月日	
尺度	- 図面番号 S-02
会社名	
事業(務)所名	近畿農政局 土地改良技術事務所

配筋標準図

1. 1 基礎梁主筋の継手、定着及び余長

- (1) 一般事項
 (ア) 梁筋は、原則として、柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、柱内に定着する。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図1.4による。
 (イ) 梁筋を柱内に定着する場合は、3.1(1)(イ)による。

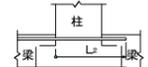


図1.1 梁筋の基礎梁内への定着

(2) 独立基礎で基礎梁にスラブが付かない場合の主筋の継手、定着及び余長

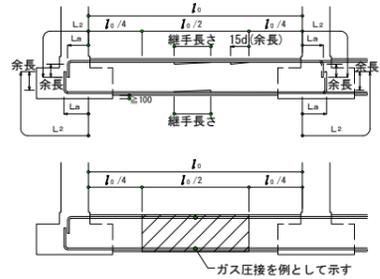


図1.2 主筋の継手、定着及び余長(その1)

- 図示のない事項は、3.1による。
- 印は、継手及び余長位置を示す。
- 破線は、柱内定着の場合を示す。
- L_d の数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

(3) 独立基礎で基礎梁にスラブが付く場合の主筋の継手、定着及び余長
 ただし、耐圧スラブが付く場合は、(4)による。

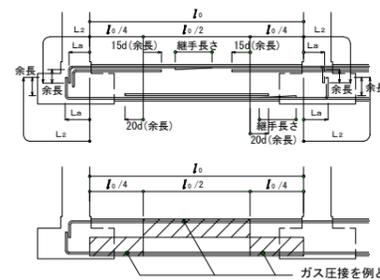


図1.3 主筋の継手、定着及び余長(その2)

- 図示のない事項は、3.1による。
- 印は、継手及び余長位置を示す。
- 破線は、柱内定着の場合を示す。
- L_d の数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

(4) 連続基礎及びべた基礎の場合の主筋の継手、定着及び余長

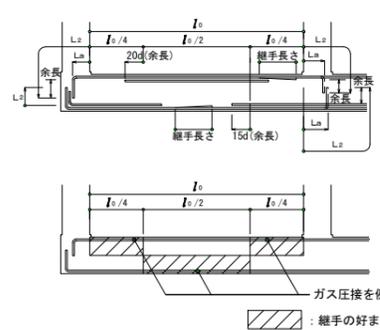


図1.4 主筋の継手、定着及び余長(その3)

- 図示のない事項は、3.1による。
- 印は、継手及び余長位置を示す。
- 破線は、柱内定着の場合を示す。
- L_d の数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

1. 2 基礎梁のあばら筋

あばら筋組立の形及びフックの位置は、3.2(1)による。ただし、梁の上下にスラブが付く場合で、かつ、梁せいが1.5m以上の場合は、図1.8によることができる。

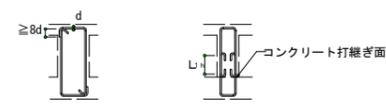


図1.5 あばら筋組立の形及びフックの位置

2. 1 柱主筋の継手、定着及び余長

(1) 柱主筋の継手及び定着の一般事項

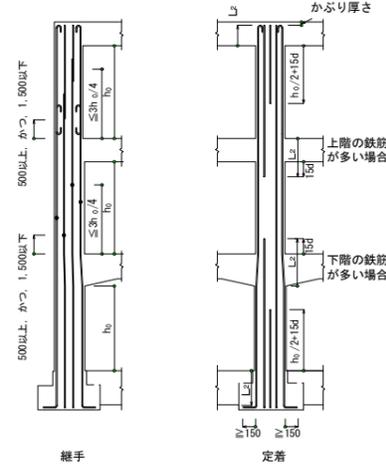


図2.1 柱主筋の継手、定着及び余長

- 柱の四隅にある主筋で、重ね継手の場合及び最上階の柱頭にある場合には、フックを付ける。
- 隣り合う継手の位置は、標仕(表5.3.3)による。
- 柱頭定着長さ L_d が確保できない場合は、構造計算等により必要長さの確認を行うものとする。
- 柱頭柱主筋について、梁上端主筋との取合いを考慮し、適切なかぶり厚さを確保する。

(2) 柱打増し部

- (a) 打増し部分に、壁、梁、スラブ筋等がとりつく場合は、壁、梁、スラブ筋等の定着長さには、打増し部分を含まない。
 (b) 土に接する柱周囲の打増しは図2.2による。

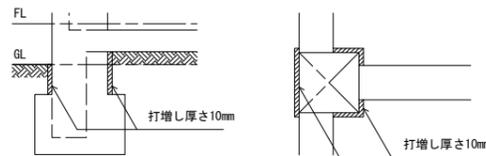
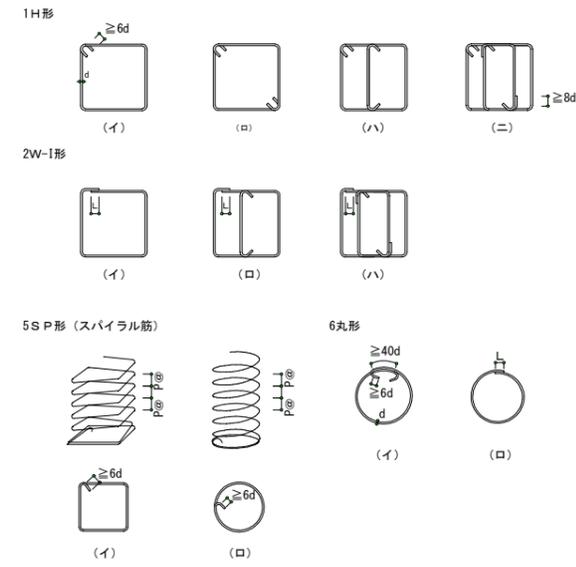


図2.2 柱打増し部

2. 2 帯筋組立の形及び割付け



- H形を標準とする。
- フック及び接手の位置は、交互とする。
- 溶接は、鉄筋の組立前に行う。
- 溶接する場合の溶接長さ L は、両面重ねアーク溶接(フレア溶接)の場合は5d以上、片面重ねアーク溶接(フレア溶接)の場合は10d以上とする。
- SP形において、柱頭及び柱筋の端部は1.5巻以上の添巻を行う。
- H形の135° 曲げフックが困難な場合は、W-I形とする。

図2.3 帯筋組立の形

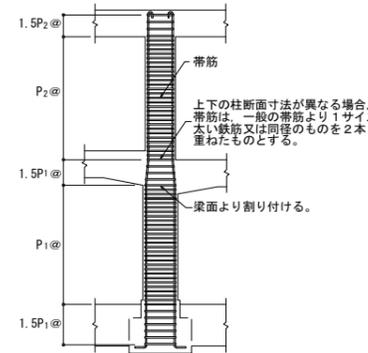


図2.4 帯筋の割付け

1. 柱に取り付け梁に段差がある場合、帯筋の間隔を1.5P₁@または1.5P₂@とする範囲は、その柱に取り付けすべての梁を考慮して適用する。なお、1P₁@、2P₁@は、特記された帯筋の間隔を示す。

3. 1 大梁主筋の継手、定着及び余長

- (1) 大梁主筋の継手及び定着の一般事項
 (ア) 梁主筋は、原則として、柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、(イ)により柱内に定着することができる。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図3.1による。



図3.1 梁主筋の梁内定着

- (イ) 梁主筋を柱内に折り曲げて定着する場合は次による。
 なお、定着の方法は、標準仕様書(5.3.4(5)(イ))による。
 上端筋: 曲げ降ろす。
 下端筋: 原則として曲げ上げる。
 (ウ) 段違い梁は、図3.2による。

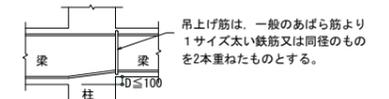


図3.2 段違い梁

(2) ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長

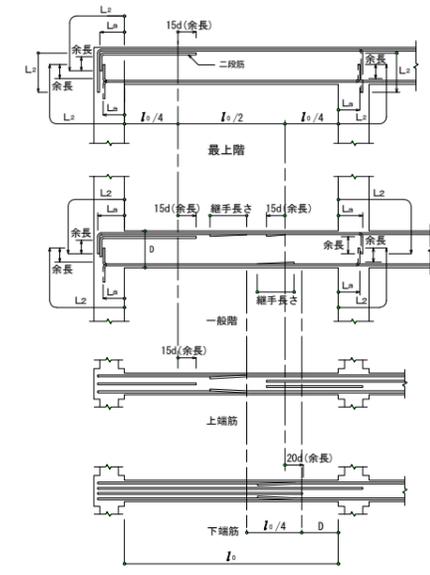


図3.3 大梁の重ね継手、定着及び余長

(3) ハンチのある場合の重ね継手、定着及び余長

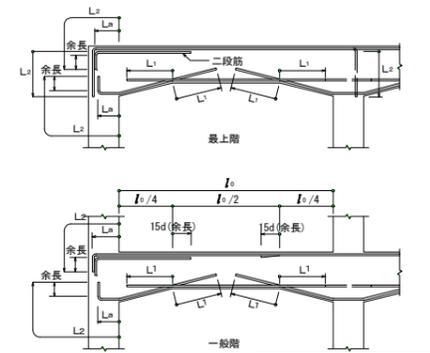


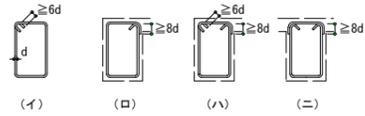
図3.4 ハンチのある大梁の定着及び余長

- 標準仕様書(5.3.2(2)(イ))で定めた鉄筋には、フックを付ける。
- 印は、継手及び余長を示す。
- 梁内定着の端部下端筋が接近するときは、 L_d のように引き通すことができる。
- 破線は、柱内定着の場合を示す。
- L_d の数値は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。

工事名	令和6年度 土地改良技術 近畿農政局土地改良技術事務所緊急用ポンプ資材庫建築工事		
図面名	新設資材庫 構造関係共通事項(配筋標準図その1)		
年月日		図面番号	S-03
尺度		会社名	
事業(務)所名	近畿農政局 土地改良技術事務所		

3.2 あばら筋（小梁、片持梁、基礎梁含む）の組立て形及び割付け等

(1) あばら筋組立の形及びフックの位置

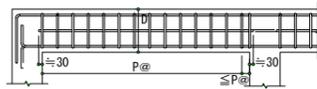


- (イ) 形を標準とする。ただし、L形梁の場合は、(ロ)又は(ハ)、T形梁の場合は、(ロ)～(ニ)とすることができる。
- フックの位置は、(イ)の場合は交互とし、(ロ)の場合は、L形ではスラブの付く側、T形では交互とする。なお、(ハ)の場合は床版の付く側を90°折曲げとする。

図3.5 あばら筋組立の形

(2) あばら筋の割付け

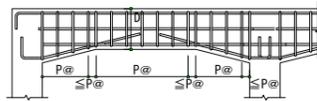
(ア) 間隔が一律でハンチのない場合



- あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
- 図中P@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図3.6 あばら筋の割付け (その1)

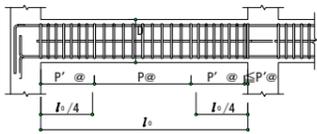
(イ) 間隔が一律でハンチがある場合



- あばら筋は、柱面の位置及びハンチに切り替わる位置から割り付ける。
- 図中P@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図3.7 あばら筋の割付け (その2)

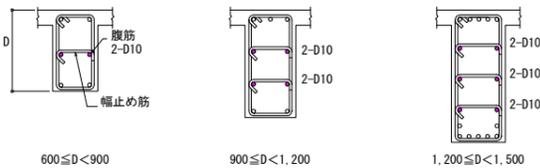
(ウ) 梁の端部で間隔の異なる場合



- あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
- 図中P@、P'@は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図3.8 あばら筋の割付け (その3)

(3) 腹筋及び幅止め筋



- 腹筋に継手を設ける場合の継手長さは、150mm程度とする。
- 幅止め筋及び受け用幅止め筋は、D10-1,000@程度とする。

図3.9 腹筋及び幅止め筋

3.4 小梁主筋の継手、定着及び余長

(1) 連続小梁の場合

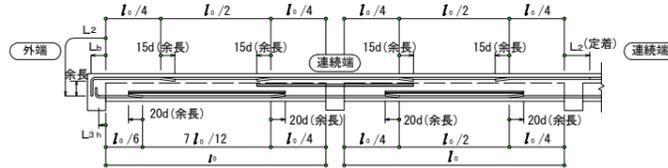


図3.10 小梁主筋の継手、定着及び余長(その1)

(2) 単独小梁の場合

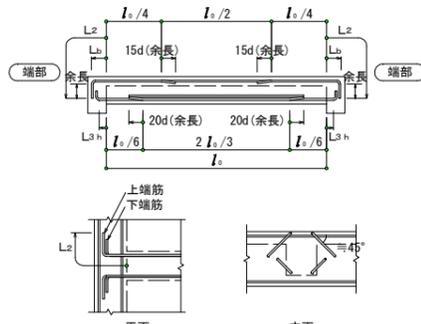
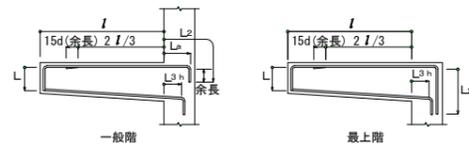


図3.11 小梁主筋の継手、定着及び余長(その2)

- 印は、余長位置を示す。
- 梁せいが小さく垂直で余長がとれない場合、斜めにしても良い。
- 図示のない事項は、1.3及び3.11に準ずる。
- Lsを確保できない場合は、標準仕様書(5.3.4(5)(イ))によることができる。

3.5 片持梁主筋の継手、定着及び余長

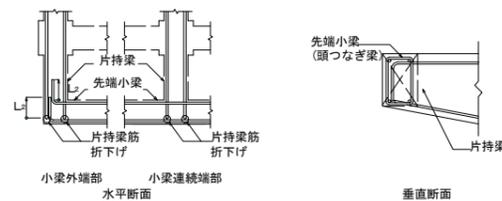
(1) 先端に小梁のない場合



- 印は、余長位置を示す。
- 先端の折曲げの長さLは、梁せいからかぶり厚さを除いた長さとする。
- 図示のない事項は、3.11による。
- Lsの数值は、原則として、柱せいの3/4倍以上とする。
- Lsを確保できない場合は、標準仕様書(5.3.4(5)(イ))によることができる。

図3.12 片持梁主筋の定着及び余長

(2) 先端に小梁がある場合



- 図示のない事項は、(1)による。
- 先端小梁終端部の主筋は、片持梁内に水平定着する。
- 先端小梁の連続端は、片持梁の先端を貫通する通し筋としてよい。

図3.13 片持梁主筋の定着

4.1 壁の配筋

(1) 壁の配筋は表4.1による。

表4.1 壁の配筋

種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)
W12	D10-200@シングル	120
W15A	D10-150@シングル	150
W15B	D10-100@シングル	
W18A	D10-200@ダブル	180
W18B	D10-150@ダブル	
W20A	D10-200@ダブル	200
W20B	D10-150@ダブル	

(注) 壁筋の配筋順序は、規定しない。

(2) 片持スラブ形階段を受ける壁の配筋は表4.2による。

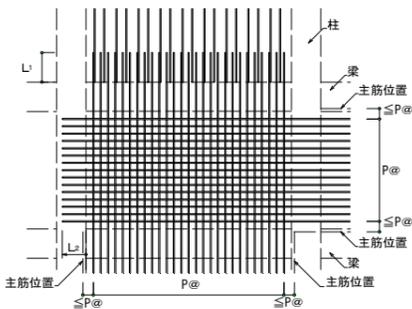
表4.2 片持スラブ形階段を受ける壁の配筋

種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)	階段の配筋種別(表6.1)
KW1	縦筋	D13-200@ダブル	KA1
	横筋	D10-200@ダブル	
KW2	縦筋	D13-150@ダブル	KA2
	横筋	D10-200@ダブル	

(注) 縦筋は、横筋の外側に配筋する。

(3) 土圧を受ける壁の配筋は、特記による。

4.2 壁の継手及び定着



- 図中のP@は、特記された壁筋の間隔を示す。
- 壁配筋の重ね継手は、定着長さはとし、鉄筋の継手位置は柱・梁以外とする。
- 幅止め筋は、縦横ともD10-1,000@程度とする。

図4.1 壁の配筋

4.3 壁の交差部及び端部の配筋

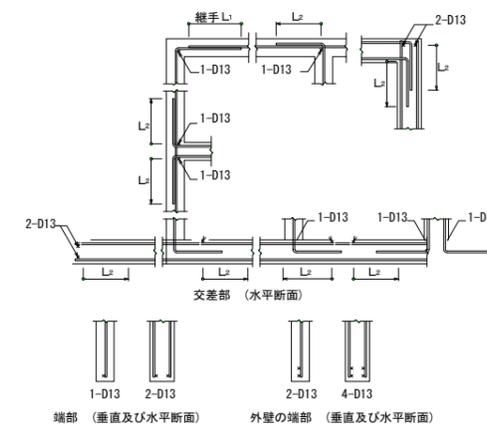


図4.2 壁の交差部及び端部の配筋

4.4 壁の開口部補強

(1) 耐震壁を除く開口部の補強筋は、A形は表4.3、B形は表4.4とする。

表4.3 壁開口部補強筋(A形)

壁の種別	補強筋	
	縦横	斜め
W12、W15	1-D13	1-D13
W18、W20	2-D13	2-D13

表4.4 壁開口部補強筋(B形)

壁の種別	補強筋	
	縦横	斜め
W12、W15	2-D13	1-D13
W18、W20	4-D13	2-D13

(2) 壁開口部補強筋の定着長さは図4.3による。

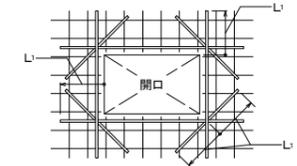


図4.3 壁開口部補強筋の定着長さ

- 開口部は柱及び梁に接する部分又は鉄筋を緩やかに曲げるにより開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。
- コンセントボックス等を壁に埋め込む場合の補強は、図示による。

4.5 パラペット

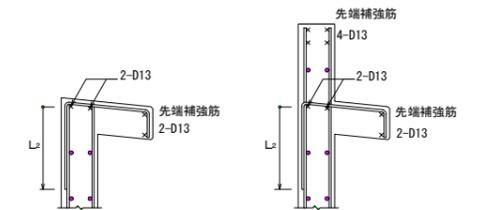


図4.4 パラペットの配筋

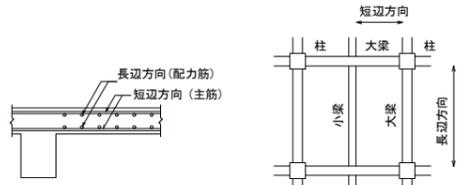
工事名	令和6年度 土地改良技術 近畿農政局土地改良技術事務所災害応急用ポンプ庫建築工事
図面名	新設資材庫 構造関係共通事項(配筋標準図その2)
年月日	
尺度	- 図面番号 S-04
会社名	
事業(務)所名	近畿農政局 土地改良技術事務所

5.1 スラブの配筋

表5.1 スラブの配筋

配筋種別	短辺方向 (主筋) 全域	長辺方向 (配力筋) 全域	配筋種別	短辺方向 (主筋) 全域	長辺方向 (配力筋) 全域
S 1	D13-100@	D13-100@	S 8	D10, D13-150@	D10-150@
S 2	同上	D13-150@	S 9	同上	D10-200@
S 3	同上	D10, D13-150@	S10	D10, D13-200@	D10, D13-200@
S 4	D13-150@	D13-150@	S11	同上	D10-200@
S 5	同上	D10, D13-150@	S12	同上	D10-250@
S 6	同上	D10-150@	S13	D10-200@	D10-200@
S 7	D10, D13-150@	D10, D13-150@	S14	同上	D10-250@

(注) 上端筋, 下端筋とも同一配筋とする。



1. 配筋の割付けは, 中央から行い, 端部は定められた間隔以下とする。
2. 鉄筋の重ね継手長さは, L_d とする。
3. 土間スラブ下の砂利地床厚さ及び捨コンクリート厚さは, 特記による。
4. 土間コンクリート補強筋の配筋及びコンクリート厚さは, 特記による。

図9.1 スラブの配筋

5.2 スラブ筋の定着及び受け筋

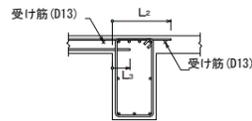


図5.2 スラブ筋の定着長さ及び受け筋(その1)

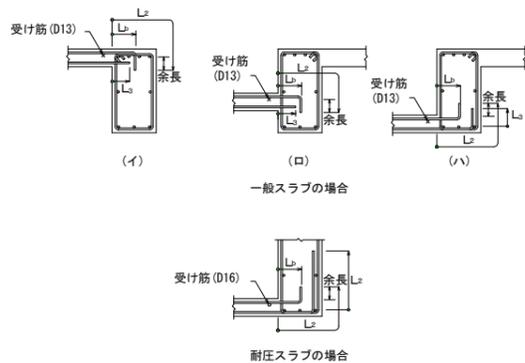


図5.3 スラブ筋の定着長さ及び受け筋(その2)

5.3 片持スラブの配筋

表5.2 CS形配筋

配筋種別	主筋	配筋種別	主筋
CS1	上 D13-100@	CS5	上 D10-200@
	下 D13-200@		下 D10-400@
CS2	上 D13-150@	CS6	上 D10, D13-200@
	下 D13-300@		下 —
CS3	上 D10, D13-150@	CS7	上 D10-200@
	下 D10, D13-300@		下 —
CS4	上 D10, D13-200@		
	下 D10-200@		

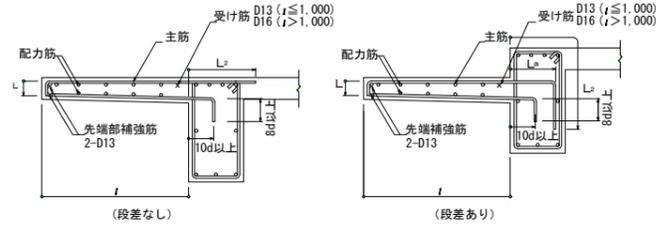


図5.4 片持スラブの配筋 (CS1 から CS5)

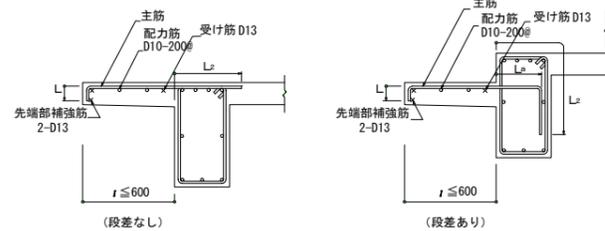


図5.5 片持スラブの配筋 (CS6 及び CS7)

1. 先端の折曲げ長さは, スラブ厚さよりかぶり厚さを除いた長さとする。
2. スラブに段差のない場合は, 主筋を引き通してスラブに定着してもよい。

5.4 片持スラブの先端に壁が付く場合の配筋

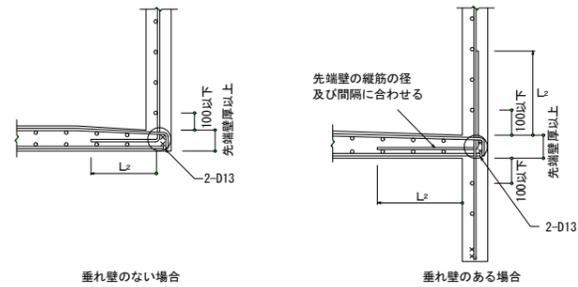
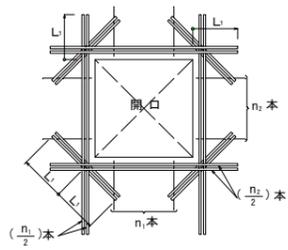


図5.6 先端に壁が付く場合の配筋

5.5 スラブの開口部の補強

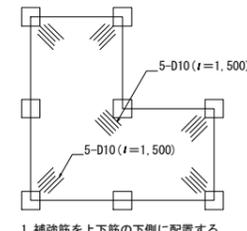


1. スラブ開口によって切られる鉄筋と同量の鉄筋で周囲を補強し, 隅角部に斜め方向に2-D13 ($L=2L_d$) シングルを上下筋の内側に配筋する。
2. スラブ開口の最大径が両方向の鉄筋間隔以下で, 鉄筋を緩やかに曲げることで, 開口部を避けて配筋できる場合は, 補強を省略することができる。
3. スラブ開口の最大径が700mm以下の場合に限る。

図5.7 スラブ開口部の補強配筋

5.6 出隅部及び入隅部の補強

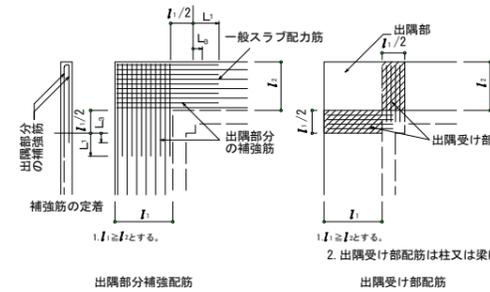
(1) 屋根スラブの出隅及び入隅部



1. 補強筋を上下筋の下側に配置する。

図5.8 出隅及び入隅部の補強配筋

(2) 片持スラブの出隅部



1. L_d とする。

出隅部分補強配筋

1. L_d とする。

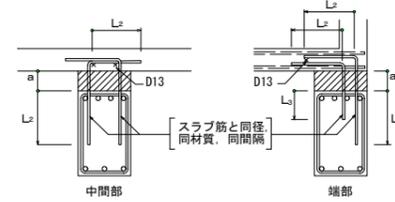
2. 出隅受け部配筋は柱又は梁に定着する。

出隅受け部配筋

図5.9 片持スラブ出隅部の補強配筋

5.7 スラブの打継ぎの補強等

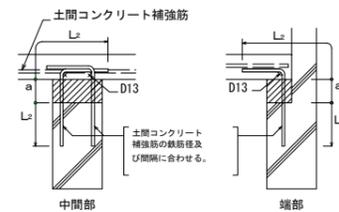
(1) 土間スラブの打継ぎ補強 (基礎梁とスラブを一体打ちとしないで, 打継ぎを設ける場合の補強を示す。)



1. 土間コンクリートとは, 土に接するスラブのうち, 床荷重を直接地盤へ伝達できるものをいい, それ以外は土間スラブとして, 梁及び柱を介して基礎へ荷重を伝達するものとする。
2. a が300mm以下の場合に限る。

図5.10 打継ぎ補強配筋

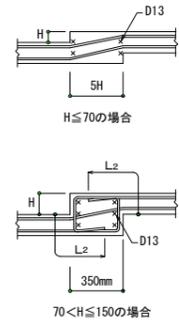
(2) 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋



1. 土間コンクリートとは, 土に接するスラブのうち, 床荷重を直接地盤へ伝達できるものをいい, それ以外は土間スラブとして, 梁及び柱を介して基礎へ荷重を伝達するものとする。
2. a が300mm以下の場合に限る。

図5.11 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋

5.8 段差のあるスラブの補強



1. 150mm以下の段差のあるスラブの場合に限る。

図5.12 段差のあるスラブの補強配筋

工事名	令和6年度 土地改良技術 近畿農政局土地改良技術事務所災害応急用ポンプ庫建築工事
図面名	新設資材庫 構造関係共通事項 (配筋標準図その3)
年月日	
尺度	- 図面番号 S-05
会社名	
事業(務)所名	近畿農政局 土地改良技術事務所